



こころ

上

-先生と私-

夏目漱石



青空文庫



文庫 青空

一

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになつたのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からぜひ来いという端書きはがきを受け取つたので、私は多少の金を工面くめんして、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れといふ電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧まない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心かんじんの当人が気に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたの

である。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分らなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく來た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数だいぶひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。したがつて一人ぼっちになつた私は別に恰好な宿を探す面倒ももたなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺鄙へんびな方角にあつた。玉突たまつきだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い瞬なわてを一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺わらぶきの間あいだを通り抜けて磯いそへ下りると、この辺へんにこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動

いていた。ある時は海の中が銭湯のよう^{せんとう}に黒い頭でごちやごちやしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑^{にぎ}やかな景色の中に裏^{うつ}まれて、砂の上に寝^ねそべつてみたり、膝頭^{ひざがしら}を波に打たしてそこいらを跳^はね廻^{まわ}るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓^{ざつとう}の間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋^{かけぢやや}が二軒あつた。私はふとした機会^{はすみ}からその一軒の方に行き慣^なれていた。長谷辺^{はせへん}に大きな別荘を構えている人と違つて、各自^{めいめい}に専有の着換場^{きがえば}を拵^{こしら}えていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着換所といつた風^{ふう}なものが必要なのであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで齧^{しお}はゆい身体^{からだ}を清めたり、ここへ帽子や金^{かさ}を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切^{いつさい}を脱^ぬぎ棄^すてる事にしていた。

二

私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするとところであつた。私はその時反対に濡れた身体を風に吹かして水から上がつて來た。二人の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかつた。それほど浜辺が混雜し、それほど私の頭が放漫であつたにもかかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴っていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へに入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすっぽりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立つていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかつた。私にはそれが第一不思議だつた。私はその二日前に由井が浜まで行つて、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になつていたので、私の凝としている間に、

大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いざれも胴と腕と股は出していなかつた。女は殊更肉を隠しがちであつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆なの前に立つてゐるこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにござんでいる日本人に、一言二言何かいった。その日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げてゐるところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿を見守つていた。すると彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行つた。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて來た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこへか行つてしまつた。

彼らの出て行つた後、私はやはり元の床几に腰をおろして烟草を吹かしていた。その時私はぽかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかつた。しかしどうしてもいつどこで会つた人か想い出せずにしまつた。

その時の私は屈託がないというよりむしろ無聊^{ぶりよう}に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会つた時刻を見計らつて、わざわざ掛茶屋まで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽^{むぎわらぼう}を被つてやつて來た。先生は眼鏡^{めがね}をとつて台の上に置いて、すぐ手拭^{てぬぐい}で頭を包んで、すたすた浜を下りて行つた。先生が昨日のよう^{きのう}に騒がしい浴客^{よくかく}の中を通り抜け^て、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後^{あと}が追い掛けくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳^{はね}かして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標^{めじるし}に抜手^{ぬきで}を切つた。すると先生は昨日と違つて、一種の弧線^{こせん}を描^{えが}いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかつた。私が陸^{おが}へ上がって雪の垂れる手を振りながら掛茶屋に入る^{しずく}と、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行つた。

三

私は次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかつた。その上先生の態度はむしろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰つて行つた。周囲がいくら賑やかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかつた。最初いつしょに来た西洋人はその後まるで姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或る時先生が例の通りさつさと海から上がつて来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとする。どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになつて、浴衣を二、三度振つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白紺の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなつたのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛けの下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うといつて、それを私の手から受け取つた。

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といつしよの方角に泳いで行つた。二丁ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返つて私に話しかけた。広い蒼い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外になかつた。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂つた。先生はまたぱたりと手足の運動を已めて仰向けになつたまま浪の上に寝た。私もその真似^{まね}をした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるようすに姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といつて私を促した。比較的強い体質をもつた私は、もつと海の中で遊んでいたかつた。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路^{みち}を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になつた。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかつた。

それから中二日おいてちょうど三日目の午後だつたと思う。先生と掛茶屋^{かけぢや}で出会つた時、先生は突然私に向かつて、「君はまだ大分長くここにいるつもりですか」と聞いた。考えの

ない私はこういう間に答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかつた。それで「どうだか分りません」と答えた。しかしにやにや笑つてゐる先生の顔を見た時、私は急に極きまりが悪くなつた。「先生は?」と聞き返さずにはいられなかつた。これが私の口を出た先生といふ言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といつても普通の旅館と違つて、広い寺の境内にある別荘のような建物であつた。そこに住んでゐる人の先生の家族でない事も解わかつた。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だといつて弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉にいゝない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際つきあいをもたないのに、そういう外国人と近付ちかづきになつたのは不思議だといつたりした。私は最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないといつた。若い私はその時暗に相手も私と同じような感じを持つていはしまいかと疑つた。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかつた。ところが先生はしばらく沈吟ちんぎんしたあとで、「どうも君の顔に

夏目漱石

じた。

は見覚えがありませんね。人違ひぢやないですか』といつたので私は変に一種の失望を感じ

ました。

おぼえがありませんね。人違ひぢやないですか』といつたので私は変に一種の失望を感じ

四

私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。
 私は先生と別れる時に、「これから折々お宅たくへ伺つても宜よござんすか」と聞いた。先生は
 単簡たんかんにただ「ええいらっしゃい」といつただけであつた。その時分の私は先生とよほど懇
 意になつたつもりでいたので、先生からもう少し濃こまやかな言葉を予期して掛かかつたのである。
 それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷めいたた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでも
 あり、また全く気が付かないようでもあつた。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、そ
 れがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。むしろそれとは反対で、不安に揺か
 されるたびに、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、
 いつか眼の前に満足に現われて来るだらうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人
 間に対して、若い血がこう素直に働くとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこ
 んな心持が起るのか解わからなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて

夏目漱石

來た。先生は始めから私を嫌っていたのではなかつたのである。先生が私に示した時々の素氣ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止めよといふ警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を輕蔑する前に、まず自分を輕蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰つて來た。帰つてから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数があるので、そのうちに一度行つておこうと思つた。しかし帰つて二日三日と経つうちに、鎌倉にいた時の気分が段々薄くなつて來た。そうしてその上に彩られる大都會の空気が、記憶の復活に伴う強い刺戟と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往來で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一ヶ月ばかりすると私の心に、また一種の弛みができてきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始めた。物欲しそうに自分の室の中を見廻した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなつた。

始めて先生のうちを訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身に沁み込むように感ぜられる好い日和であった。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵たいてい宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉を思い出して、理由わけもない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。げじょ下女の顔を見て少し躊躇ちゅうちょしてそこに立つていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へはいつた。すると奥さんらしい人が代つて出て來た。美しい奥さんであつた。

私はその人から鄭寧ていねいに先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向たむけけに行く習慣なのだそうである。「たつた今出たばかりで、十分になるか、ならないかでござります」と奥さんは氣の毒そうにいつてくれた。私は会釈えしゃくして外へ出た。賑かな町の方へ一丁ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行つてみる気になつた。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵きびすをめぐ回らした。

五

私は墓地の手前にある苗畠の左側からはいつて、両方に楓を植え付けた広い道を奥の方へ進んで行つた。するとその端に見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て來た。私はその人の眼鏡の縁が日に光るまで近く寄つて行つた。そうして出し抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍繰り返した。その言葉は森閑とした昼の中に異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも応えられなくなつた。

「私の後を跟けて來たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情の中には判然いえないような一種の曇りがあつた。

私は私がどうしてここへ來たかを先生に話した。

「誰の墓へ參りに行つたか、妻がその人の名をいいましたか」

夏目漱石

「いいえ、そんな事は何もおつしやいません」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会ったあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心したらしい様子であつた。しかし私にはその意味がまるで解らなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍に、一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが建ててあつた。全権公使何々といふのもあつた。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「これは何と読むんでしょうね」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ませるつもりでしそうね」といつて先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりにかれこれいいたがるのを、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまいに「あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありませんね」といつた。私は黙つた。先生もそれぎり何ともいわなくなつた。

夏目漱石

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹の地面をならして新墓地を作っている男が、鍬の手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的のない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつもより口数を利かなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶらいつしょに歩いて行つた。

「すぐお宅へお帰りですか」

「ええ別に寄る所もありませんから」

二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあそこにありますか」と私がまた口を利き出した。

「いいえ」

夏目漱石

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」
「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかつた。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると
一町ほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻つて來た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」
「お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」
「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかつた。

六

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であつた。先生に会う度数^{どすう}が重なるにつれて、私はますます繁く先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶^{あいさつ}をした時も、懇意になつたその後も、あまり変りはなかつた。先生は何時も静かであつた。ある時は静か過ぎて淋しいくらいであつた。私は最初から先生には近づきがたい不思議があるようになつてゐた。それでいて、どうしても近づかなければならぬという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもつていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかし、その私だけにはこの直感^{のちか}が後になつて事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいといわれても、馬鹿げていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頬もじくまた嬉しく思つてゐる。人間を愛し得る人、愛せざにはいられない人、それでいて自分の懷に入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事のできない人、——これが先生であつた。

今いつた通り先生は始終静かであつた。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射すように。射すかと思うと、すぐ消えるには消えたが。私が始めてその曇りを先生の眉間に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滯に過ぎなかつた。私の心は五分と経たないうちに平素の弾力を回復した。私はそれなり暗そうなこの雲の影を忘れてしまつた。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春の尽きるに間のない或る晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏の大樹を眼の前に想い浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例として墓参に行く日が、それからちょうど三日目に当つていた。その三日目は私の課業が午で終える楽な日であつた。私は先生に向かつてこういつた。

「先生雑司ヶ谷の銀杏はもう散つてしまつたでしようか」「まだ空坊主にはならないでしよう」

夏目漱石

先生はそう答えながら私の顔を見守つた。そうしてそこからしばし眼を離さなかつた。
私はすぐいつた。

「今度お墓参り(はがまい)にいらつしやる時にお伴(とも)をしても宜(よ)がせんすか。私は先生といつしょにあすこいらが散歩(はがま)してみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

「しかしついでに散歩をなすつたらちようど好いじやありませんか」

先生は何とも答えなかつた。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだけなんだから」といつて、どこまでも墓参(ぼさん)と散歩を切り離そうとする風(ふう)に見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になつた。

「じゃお墓参りでも好いからいつしょに伴(は)つれて行つて下さい。私もお墓参りをしますから」
実際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると先生の眉(まゆ)がちょっと曇つた。眼のうちに異様の光が出た。それは迷惑とも嫌惡(けんお)とも畏怖(いふ)と

夏目漱石

も片付けられない微かな不安らしいものであつた。私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだつたのである。

「私は」と先生がいつた。「私はあなたに話す事のできないある理由があつて、他といつしょにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行つた事がないのです」

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する氣でその宅へ出入りをするのではなかつた。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて來たろう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくとも、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになつた。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやつて来るのですか」

夏目漱石

「何でといって、そんな特別な意味はありません。——しかしそ邪魔なんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかつた。私は先生の交際の範囲の極^{きわ}めて狭い事を知つていた。先生の元の同級生などで、その頃^{ころ}東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知つていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあつたが、彼らのいずれもは皆^{みんな}私ほど先生に親しみをもつていないように見受けられた。

「私は淋^{さび}しい人間です」と先生がいつた。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかといつて聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかつた。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳^{いくつ}ですか」といつた。

この問答は私にとつてすこぶる不得要領のものであつたが、私はその時底まで押さずに帰つてしまつた。しかもそれから四日と経たないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否や笑い出した。

「また来ましたね」といつた。

「ええ来ました」といつて自分も笑つた。

私は外の人からこういわれたらきつと癪に触つたろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であつた。癪に触らないばかりでなくかえつて愉快だつた。

「私は淋しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じやないですか。私は淋しくつても年を取つてゐるから、動かすにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしよう。動けるだけ動きたいのでしよう。動いて何かに打つかりたいのでしよう……」

「私はちつとも淋しくはありません

「若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅へ来るのでですか」

夏目漱石

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会つてもおそらくまだ淋^{さび}しい気がどこかでしているでしよう。私にはあなたのためにその淋しさを根^{ねもと}元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外の方を向いて今に手を広げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなります」

先生はこういつて淋しい笑い方をした。

八

幸いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私は、この予言の中に含まれている明白な意義さえ了解し得なかつた。私は依然として先生に会いに行つた。その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになつた。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないようになつた。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかつた。けれども年の若い私の今まで経過して來た境遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかつた。それが源因かどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたんびに同じ印象を受けない事はなかつた。しかしそれ以外に私はこれといてとくに奥さんについて語るべき何物ももたないような気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会が来なかつたのだと解釈する方が正当かも知れない。しかし私はいつも先生に付属した一部分のような心持で奥さん

に対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになつていた。それで始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美しいという外に何の感じも残つていない。

ある時私は先生の宅で酒を飲まされた。その時奥さんが出て来て傍で酌そばをしてくれた。先生はいつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といつて、自分の呑のみ干した盃さかずきを差した。奥さんは「私は……」と辞退あとしきけた後、迷惑そうにそれを受け取つた。奥さんは綺麗きれいな眉まゆを寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間に下のような会話が始まつた。

「珍らしい事。私に呑めとおつしやつた事は滅多めつたにないのにね」

「お前は嫌いだからさ。しかし稀たまには飲むといいよ。好い心持になるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりで。でもあなたは大変ご愉快ゆかいそうね、少しご酒しゅを召し上がるど」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもというわけにはいかない」

夏目漱石

「今夜はいかがです」

「今夜は好い心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がる宜ござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がつて下さいよ。その方が淋しくなくつて好いから」

先生の宅は夫婦と下女だけであつた。行くたびに大抵はひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはあるでなかつた。或る時は宅の中にいるものは先生と私だけのような気がした。

「子供でもあると好いんですけどね」と奥さんは私の方を向いていつた。私は「そうですな」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持つた事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅いもののように考えていた。

「一人貰つてやろうか」と先生がいつた。

「貰ッ子じや、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供は今まで経つたつてできっこないよ」と先生がいつた。

夏目漱石

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といつて高く笑つた。

九

私の知る限り先生と奥さんは、仲のいい夫婦の一対であつた。家庭の一員として暮した事のない私のことだから、深い消息は無論解らなかつたけれども、座敷で私と対坐している時、先生は何かのついでに、下女を呼ばないで、奥さんを呼ぶ事があつた。（奥さんの名は静といつた）。先生は「おい静」といつでも襖の方を振り向いた。その呼びかたが私は優しく聞こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であつた。ときたまご馳走になつて、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描き出されるようであつた。

先生は時々奥さんを伴つて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根から貰つた絵端書をまだ持つてゐる。日光へ行つた時は紅葉の葉を一枚封じ込めた郵便も貰つた。

当時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまずこんなものであつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとする

と、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆いらしかつた。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になつてゐるので、格子の前に立つていた私の耳にその言逆いの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ帰つた。

妙に不安な心持が私を襲つて來た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失つてしまつた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようといつて、下から私を誘つた。先刻帯の間へ包んだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は帰つたなりまだ袴はがまを着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といつしよに麦酒ビールを飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒險のできない人であつた。

夏目漱石

「今日は駄目だめです」といつて先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は氣の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻の事が引っ懸つていた。肴の骨が咽喉に刺さった時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止した方が好かろうかと思い直したりする動搖が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていきますね」と先生の方からいい出した。「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかつた。

「実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまつたんです」と先生がまたいつた。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかつた。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だといつて聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」

夏目漱石

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問い合わせに答えようとはしなかつた。

「妻が考えているような人間なら、私だつてこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁も二丁もつづいた。その後で突然先生が口を利き出した。

「悪い事をした。怒つて出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちょっとそこで途切れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移つて行つた。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽こつけいだが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中位ちゅうべいに見えます」と私は答えた。この答えは先生にとつて少し案外らしかつた。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅へ帰るには私の下宿のつい傍そばを通るのが順路であつた。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に済まないような気がした。「ついでにお宅たくの前までお伴ともしましょうか」といつた。先生は忽たちまち手で私を遮ささえぎつた。

「もう遅いから早く帰りたまえ。私も早く帰つてやるんだから、妻君さいくんのために」

先生が最後に付け加えた「妻君さいくんのために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰つてから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君さいくんのために」という言葉を忘れなかつた。

先生と奥さんの間に起つた波瀾はらんが、大したものでない事はこれでも解わかつた。それがまた滅多めつたに起る現象でなかつた事も、その後絶えず出入りをして来た私にはほぼ推察ができた。それどころか先生はある時こんな感想すら私に洩もらした。

「私は世の中で女さゝといふものをたつた一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思つてくれています。そういう意味からいって、私たちとは最も幸福に生れた人間の一対であるべきはずです」

私は今前後の行き挂りを忘れてしまつたから、先生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたのか、判然いう事ができない。けれども先生の態度の眞面目(まじめ)であつたのと、調子の沈んでいたのとは、いまだに記憶に残つてゐる。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一対であるべきはずです」という最後の一旬であつた。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきはずであると断わつたのか。私にはそれだけが不審であつた。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語氣が不審であつた。先生は事実はたして幸福なのだろうか、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心(うち)で疑らざるを得なかつた。けれどもその疑いは一時限りどこかへ葬(ほうむ)られてしまつた。

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向(さしむか)いで話をする機会に出合つた。先生はその日横浜(よこはま)を出帆(しゅつぱん)する汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋(しんばし)へ送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃(ころ)の習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらう必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する

夏目漱石

礼義れいぎとしてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ帰るから留守でも私に待つているようにといい残して行つた。それで私は座敷へ上がって、先生を待つ間、奥さんと話をした。

十一

その時の私はすでに大学生であつた。始めて先生の宅へ来た頃から見るとずつと成人した氣でいた。奥さんとも大分懇意になつた後であつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向いで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今はまるで忘れてしまつた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。しかしそれを話す前に、ちょっと断つておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていた。しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ帰つて少し経つてから始めて分つた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。

先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想については、先生と密切の関係をもつてゐる私より外に敬意を払うものあるべきはずがなかつた。それを私は常に惜しい事だといつた。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」と答えるぎりで、取り合わなかつた。私にはその答えが謙遜過ぎ

てかえつて世間を冷評するようにも聞こえた。実際先生は時々昔の同級生で今著名になつてゐる誰彼^{だれかれ}を捉^{とら}えて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々^{うんぬん}してみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平氣でいるのが残念だつたからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛けの資格のない男だから仕方^{がりません}」といつた。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の継^{つづ}げないほどに強いものだつたので、私はそれぎり何もう勇氣が出なかつた。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて來た。

「先生はなぜああやつて、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしよう」

「あの人は馱目^{だめ}ですよ。そういう事が嫌いなんですから」

「つまり下らない事だと悟つていらつしやるんでしようか」

夏目漱石

「悟るの悟らないのつて、——そりや女だからわたくしには解りませんけれど、おそらくそんな意味じやないでしよう。やつぱり何かやりたいのでしよう。それでいてできないんです。だから気の毒ですわ」

「しかし先生は健康からいって、別にどこも悪いところはないようじやありませんか」「丈夫ですとも。何にも持病はありません

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解ら^{わか}ないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だけ、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語氣には非常に同情があつた。それでも口元だけには微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ眞面目^{まじめ}だつた。私はむずかしい顔をして黙つていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じやなかつたんですよ。若い時はまるで違つていました。それが全く変つてしまつたんです」

「若い時つていつ頃ですか」と私が聞いた。

夏目漱石

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知つていらつしやつたんですか」

奥さんは急に薄赤い顔をした。

十二

奥さんは東京の人であつた。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知つていた。奥さんは「本当いうと^{あい}合の子なんですよ」といつた。奥さんの父親はたしか鳥取^{とうとり}かどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸といつた時分^{じぶん}の市ヶ谷^{いちがや}で生れた女なので、奥さんは冗談半分そういつたのである。ところが先生は全く方角違ひの新潟県人^{にいがた}であつた。だから奥さんがもし先生の書生時代を知つているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであつた。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだつたので、私の方でも深くは聞かずにおいた。

先生と知り合いになつてから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何ものも聞き得なかつた。私は時によると、それを善意に解釈してもみた。年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎んでいるのだろうと思つた。時によると、またそれを悪くも取つた。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代

前の因襲のうちに成人したために、そういう艶っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。もつともどちらも推測に過ぎなかつた。そうしてどちらの推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していだ。

私の仮定ははたして誤らなかつた。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとって見慘なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかつた。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまつた。

私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たともいえる二人の恋愛については、先刻いつた通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかつた。奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残つてゐる事がある。或る時花時分に私は先生といつしょに上野へ行つた。そうしてそこで美しい一対の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添つて花の下

夏目漱石

を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙そばだてている人が沢山あつた。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいつた。
「仲が好よさそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかつた。二人の男女を視線の外に置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかつた。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、冷評ひやかしましたね。あの冷評ひやかしのうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交まじっていましよう」

夏目漱石

「そんな風に聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし
……しかし君、恋は罪悪ですよ。解つていますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかつた。

十三

我々は群衆の中にいた。群衆はいずれも嬉しそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかつた。

「恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語氣は前と同じように強かつた。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじやない、もう解つてはいるはずです。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじやありませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であつた。思いあたるようなものは何にもなかつた。

「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだらうと思つて動きたくなるのです」

夏目漱石

「今それほど動いちやいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじやありませんか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上るのぼる階段かいだんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異にしているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお思いになれば仕方がありますが、私にそんな気の起つた事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかつた。

夏目漱石

「しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代
りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかつた。いずれにしても先生のいう
罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつた。その上私は少し不愉快になつた。

「先生、罪悪という意味をもつと判然^{はつきり}いつて聞かして下さい。それでなければこの問題を
ここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実^{まこと}を話している気でいた。ところが実際は、あなたを
焦慮^{じら}していたのだ。私は悪い事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯渓^{うぐいすだに}の方角に静かな歩調で歩いて行つた。垣^{すき}の隙間^{すきま}から広
い庭の一部に茂る熊笹^{くまざさ}が幽邃^{ゆうすい}に見えた。

「君は私がなぜ毎月雑司^{まいづ}ヶ谷^{がや}の墓地に埋つている友人の墓へ参るのか知っていますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問い合わせに對して答えられない
という事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が
付いたようにこういつた。

夏目漱石

「また悪い事をいつた。焦慮じらせるのが悪いと思って、説明しようとすると、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

私には先生の話がますます解わからなくなつた。しかし先生はそれなり恋を口にしなかつた。

十四

年の若い私はややともすると一図^{いちず}になりやすかつた。少なくとも先生の眼にはそう映つていたらしい。私は学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであつた。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであつた。とどの詰まりをいえば、教壇に立つて私を指導してくれる偉い人々よりもただひとりを守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであつた。

「あんまり逆^の上ちやいけません」と先生がいつた。

「覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があつた。その自信を先生は肯^{うけ}がつてくれなかつた。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭^{いや}になります。私は今のあなたからそれほどに思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」

夏目漱石

「私はお氣の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぼたぼた点じていた椿の花はもう一つも見えなかつた。先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた。

「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

その時生垣の向うで金魚壳りらしい声がした。その外には何の聞こえるものもなかつた。大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は存外静かであつた。家の中はいつもの通りひつそりしていた。私は次の間に奥さんのいる事を知つていた。黙つて針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知つていた。しかし私は全くそれを忘れてしまつた。

「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そして直接の答えを避けた。

夏目漱石

「私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになつてているのです。自分を呪うより外に仕方がないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だつて確かなものはないでしよう」

「いや考えたんじやない。やつたんです。やつた後で驚いたんです。そうして非常に怖くなつたんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿つて行きたかつた。すると襖の陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が一度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といつた。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間まへ呼んだ。二人の間にどんな用事が起つたのか、私には解わからなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ帰つて來た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐ふくしゅうをするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとします。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬しげぞを斥けたいと思うのです。

夏目漱石

私は今より一層淋^{さび}しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己^{おの}れとに充^みちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしよう」

私はこういう覚悟をもつている先生に対して、いうべき言葉を知らなかつた。

十五

その後私は奥さんの顔を見るたびに気になつた。先生は奥さんに対しても始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかつた。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかつたから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であつたから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかつたから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだろうか。先生は坐つて考える質の人であつた。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐つて世の中を考えても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかつた。先生の覚悟は生きた覚悟らしかつた。火に焼けて冷却し切つた石造家屋の輪廓とは違つていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれてゐるらしかつた。自分と切り離された他人の事実でなくつて、

自分自身が痛切に味わつた事実、血が熱くなつたり脈が止まつたりするほどの事実が、畳み込まれてゐるらしかつた。

これは私の胸で推測するがものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯のようであつた。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽い被せた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解らなかつた。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震わせた。

私は先生のこの人生観の基点に、或る強烈な恋愛事件を仮定してみた。（無論先生と奥さんとの間に起つた）。先生がかつて恋は罪悪だといった事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭世に近い覚悟が出ようはずがなかつた。「かつてはその人の前に跪いた」という記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとする」といった先生の言葉は、現代一般の誰彼について用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののようにもあつた。

雜司ヶ谷ぞうしがやにある誰だれだか分らない人の墓、——これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつたりながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命いのちの断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取つてその墓は全く死んだものであつた。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎにはならなかつた。むしろ二人の間に立つて、自由の往来を妨げる魔物のようであつた。

そういうしてゐるうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならない時機が来た。その頃ころは日の詰つまつて行くせわしない秋に、誰も注意を惹ひかれる肌寒はださむの季節であつた。先生の附近ふきんで盜難かかに罹つたものが三、四日続いて出た。盜難はいずれも宵の口であつた。大したものを持つて行かれた家はほとんどなかつたけれども、はいられた所では必ず何か取られた。奥さんは氣味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空あけなければならぬ事情がきてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外の二、三名と共に、ある所でその友人に飯めしを食わせなければならなくなつた。先生は訳を話して、私に帰つてくる間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。

十六

私の行つたのはまだ灯の点くか点かない暮れ方であつたが、几帳面な先生はもう宅にいなかつた。「時間に後れると悪いつて、つい今しがた出掛けました」といつた奥さんは、私を先生の書斎へ案内した。

書斎には洋机と椅子の外に、沢山の書物が美しい背皮を並べて、硝子越しに電燈の光で照らされていた。奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲団の上へ私を坐させて、「ちつとそこいらにある本でも読んで下さい」と断つて出て行つた。私はちょうど主人の帰りを待ち受ける客のような気がして済まなかつた。私は畏まつたまま烟草を飲んでいた。奥さんが茶の間で何か下女に話している声が聞こえた。書斎は茶の間の縁側を突き当つて折れ曲った角にあるので、棟の位置からいうと、座敷よりもかえつて掛け離れた静かさを領していた。ひとしきりで奥さんの話し声が已むと、後はしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝じしながら気をどこかに配つた。

三十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔を出した。「おや」といつて、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に来た人のように鹿爪しかづめらしく控えている私をおかしそうに見えた。

「それじゃ窮屈でしよう」

「いえ、窮屈じやありません」

「でも退屈でしよう」

「いいえ。泥棒が来るかと思つて緊張しているから退屈でもありません」

奥さんは手に紅茶茶碗こうちゃぢゃわんを持ったまま、笑いながらそこに立っていた。

「ここは隅つこだから番をするにはよくありませんね」と私がいつた。

「じや失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴ちようだい。ご退屈たいくつだろうと思つて、お茶を入れて持つて來たんですが、茶の間で宜しければあちらで上げますから」

私は奥さんの後に尾あとついて書斎を出た。茶の間には綺麗きれいな長火鉢ながひばちに鉄瓶てつびんが鳴つていた。私はそこで茶と菓子のご馳走ちそくになつた。奥さんは寝ねられないといけないといつて、茶碗に手を触れなかつた。

夏目漱石

「先生はやつぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」

「いいえ滅多に^{めった}出た事はありません。近頃^{ちがごろ}は段々人の顔を見るのが嫌い^{きら}になるようです」

こういつた奥さんの様子に、別段困つたものだという風^{ふう}も見えなかつたので、私はつい大胆になつた。

「それじゃ奥さんだけが例外なんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なんです」

「そりや嘘^{うそ}です」と私がいつた。「奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」

「あなたは学問をする方だけあつて、なかなかお上手ね。^{から}空っぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだともいわれるじやありませんか。それと同^{おん}なじ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

夏目漱石

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盆でよくああ飽きずけんしゅうに献酬けんしゅうができると思てひどいますわ」

奥さんの言葉は少し手痛てひどかつた。しかしその言葉の耳障みみざわりからいうと、決して猛烈なものではなかつた。自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出すほどに奥さんは現代的でなかつた。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。

十七

私はまだその後にいうべき事をもつていた。けれども奥さんから徒らに議論を仕掛ける男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗の底を覗いて黙つている私を外さないように、「もう一杯上げましようか」と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？ 一つ？ ツツ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数を聞いた。奥さんの態度は私に媚びるというほどではなかつたけれども、先刻の強い言葉を力めて打ち消そうとする愛嬌に充ちていた。

私は黙つて茶を飲んだ。飲んでしまつても黙つていた。

「あなた大変黙り込んだのね」と奥さんがいつた。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱り付けられそうですから」と私は答えた。「まさか」と奥さんが再びいつた。

夏目漱石

二人はそれを緒口にまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先刻の続きをもう少しいさせて下さいませんか。奥さんには空な理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上の空でいつてる事じやないんだから」

「じやおっしゃい」

「今奥さんが急にいなくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしようか」「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないじやありませんか。私の所へ持つて来る問題じやないわ」

「奥さん、私は眞面目ですよ。だから逃げちやいけません。正直に答えなくつちや」
「正直よ。正直にいつて私には分らないのよ」

「じや奥さんは先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか。これは先生に聞くよりもしろ奥さんに伺つていい質問ですから、あなたに伺います」

「何もそんな事を聞き直つて聞くなくつても好いじやありませんか」

「眞面目くさつて聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」

夏目漱石

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなつたら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどつちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなつたら後でどうなるでしょう。先生から見てじやない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」

「そりや私から見れば分つてあります。（先生はそう思つていなかかも知れませんが）。先生は私を離れれば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そういうと、己惚おのぼれになるようですが、私は今先生を人間としてできるだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があつても私ほど先生を幸福にできるものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」

「その信念が先生の心に好く映るはずだと私は思いますが」

「それは別問題ですか」

「やっぱり先生から嫌われているとおつしやるんですか」

夏目漱石

「私は嫌われてるとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌いになつてているんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」
奥さんの嫌われているという意味がやつと私に呑み込んだ。

十八

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟を与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかつた。

私は女というものに深い交際^{つきあい}をした経験のない迂闊^{うかつ}な青年であつた。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬^{どうけい}の目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然^{ばくぜん}と夢みていたに過ぎなかつた。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あつた。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえつて変な反撥力^{はんぱつりょく}を感じた。奥さんに対した私にはそんな気がまるで出なかつた。普通男女の間に横たわる思想の不平均という考えもほとんど起らなかつた。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

夏目漱石

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもつと活動なさらないのだろうといって、あなたに聞いた時に、あなたはおつしやつた事がありますね。元はああじやなかつたんだつて」「ええいいました。実際あんなじやなかつたんですもの」

「どんなどつたんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だつたんです」

「それがどうして急に変化なすつたんですか」

「急にじやありません、段々ああなつて來たのよ」

「奥さんはその間^{あいだ}始終先生といつしょにいらしつたんでしょう」

「無論いましたわ。夫婦ですもの」

「じや先生がそう変つて行かれる源因^{げんいん}がちゃんと解^{わか}るべきはずですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういうわれると實に辛^{つら}いんですけど、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍^{なんべん}あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」

「先生は何とおつしやるんですか」

夏目漱石

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと
いうだけで、取り合つてくれないんです」

私は黙つていた。奥さんも言葉を途切れらした。とぎ下女部屋げじょべやにいる下女はことりとも音をさせなかつた。私はまるで泥棒の事を忘れてしまつた。

「あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然奥さんが聞いた。
「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいつて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さん
さんがまたいつた。「これでも私は先生のためにできるだけの事はしているつもりなん
です」

「そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証しま
す」

奥さんは火鉢の灰を搔き馴かねらした。それから水注みずさしの水を鉄瓶てつびんに注そした。鉄瓶たぢばんは忽ち鳴り
を沈めた。

夏目漱石

「私はとうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだというんです。そういうわれると、私悲しくなつて仕様がないんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた。

十九

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。私がその氣で話しているうちに、奥さんの様子が次第に変つて來た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かし始めた。自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要點はここにあつた。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられなかつた。底を割ると、かえつてその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中で厭になつたのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折つても、その推測を突き留めて事実とする事ができなかつた。先生の態度はどこまでも良人らしかつた。親切で優しかつた。疑いの塊りをその日その日の情合で包んで、そつと胸の奥にしまつておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

夏目漱石

「あなたどう思つて？」と聞いた。「私からああなつたのか、それともあなたのいう人世觀とか何とかいうものから、ああなつたのか。隠さずいつて頂戴」

私は何も隠す気はなかつた。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかつた。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解りません」

奥さんは予期の外れた時に見る憐れな表情をその咄嗟に現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌つていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐かない方でしよう」

奥さんは何とも答えなかつた。しばらくしてからこういつた。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけども……」

「先生がああいう風になつた源因についてですか」

夏目漱石

「ええ。もしそれが源因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

「奥さんはいい渡つて膝ひざの上に置いた自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すつて。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱しかられるから。叱られないところだけよ」

私は緊張して唾液つばきを呑のみ込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語くような小さな声で、「実は変死したんですよ」といつた。それは「どうして」と聞き返さずにはいられないようないい方であつた。

「それつ切りしかいえないのよ。けれどもその事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々変つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく

夏目漱石

解つていないでしよう。けれどもそれから先生が変つて來たと思えば、そう思われない事もないのよ」

「その人の墓ですか、雑司^{ぞうし}ヶ谷^{がや}にあるのは」

「それもいわない事になつてゐるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるものでしようか。私はそれが知りたくつて堪^{たま}らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

二十

私は私のつらまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。奥さんもまたできるだけ私によつて慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども私はもともと事の大根おおねを攫つかんでいなかつた。奥さんの不安も実はそこに漂ただよう薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかつた。知れているところでも悉すっかり皆は私に話す事ができなかつた。したがつて慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしてゐた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚束おぼつかない私の判断に縋り付こうとした。

十時頃になつて先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐つてゐる私をそつちのけにして立ち上あがつた。そして格子こうしを開ける先生をほとんど出合あい頭がしらに迎えた。私は取り残されながら、後あとから奥さんに尾ついて行つた。下げ女じょだけは仮寢うたたねでもしていたとみえて、ついに出て来なかつた。

先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜つた涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺めた。もしそれが詐りでなかつたらば、（実際それは詐りとは思えなかつたが）、今までの奥さんの訴えは感傷を**センチメント**もてあそとくに私を相手に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかつた。もつともその時私の奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかつた。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかつたんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合が抜けやしませんか」といつた。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰つぶさせて氣の毒だというよりも、せつかく来たのに泥棒がはいらなくつて氣の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそういながら、先刻出した西洋菓子の残りを、紙に包ん

夏目漱石

で私の手に持たせた。私はそれを袂たもとへ入れて、人通りの少ない夜寒よさむの小路こうじを曲折して賑にぎやかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子もらを貰もらつて帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見てはいなかつた。私はその翌日午飯よくじつひるめしを食いに学校から帰つてきて、昨夜机ゆうべの上に載のせて置いた菓子の包みを見ると、すぐその中からチヨコレートを塗つた鳶色とびいろのカステラを出して頬張ほおばつた。そうしてそれを食う時に、必竟ひつきようこの菓子を私にくれた二人の男女なんによは、幸福な一対いっついとして世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わつた。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかつた。私は先生の宅うちへ出はりをするついでに、衣服の洗あらい張はりや仕立した方かたなどを奥さんに頼んだ。それまで縫紉じゅばんというものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかつたものを重ねるようになったのはこの時からであつた。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえつて退屈凌たいくつしのぎになつて、結句身体けつくからだの薬だぐらいの事をいつていた。

夏目漱石

「こりや 手織ておりね。こんな地じの好い着物は今まで縫つた事がないわ。その代り縫い悪いのよそりやあ。まるで針が立たないんですもの。お蔭かげで針を二本折りましたわ」
こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面倒めんどうくさいという顔をしなかつた。

二十一

冬が来た時、私は偶然國へ帰らなければならぬ事になつた。私の母から受け取つた手紙の中に、父の病氣の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰つて来てくれと頼むように付け足してあつた。

父はかねてから腎臓を病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性であつた。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかつた。現に父は養生のお蔭一つで、今日までどうかこうか凌いで來たように客が来ると吹聴していた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返つた。家内のものは軽症の脳溢血^{のういつけつ}と思い違えて、すぐその手当をした。後で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになつたのである。

冬休みが来るにはまだ少し間^まがあつた。私は学期の終りまで待つていても差支えあるまいと思つて一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様

子だの、母の心配している顔だのが時々目に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗めた私は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

先生は少し風邪のかぜの氣味で、座敷へ出るのが臆劫だといつて、私をその書斎に通した。書斎の硝子戸から冬に入つて稀まれに見るような懐かしい和らかな日光が机掛けの上に射していた。先生はこの日あたりの好い室の中へ大きな火鉢を置いて、五徳の上に懸けた金盥から立ち上がる湯気で、呼吸の苦しくなるのを防いでいた。

「大病は好いが、ちょっとした風邪などはかえつて厭いやなものですね」といつた先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病気という病気をした事のない人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなつた。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病気は眞平まっぴらです。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」

「そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてる」

夏目漱石

私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりや困るでしよう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」
先生は奥さんを呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それを奥の茶箪笥か何かの抽出から出して來た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧に重ねて、「そりやご心配ですね」といつた。

「何遍も卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病氣で亡くなつたのだという事が始めて私に解つた。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいつた。

「そうさね。私が代られれば代つてあげても好いが。——嘔氣はきげはあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、大方ないんでしょう」

おおかた

夏目漱石

「吐氣さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいつた。
私はその晩の汽車で東京を立つた。

二十二

父の病氣は思つたほど悪くはなかつた。それでも着いた時は、床の上に胡坐あぐらをかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢してこう凝じづとしている。なにもう起きても好いのさ」といつた。しかしその翌日よくじつからは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまつた。母は不承無性ふしようぶじょうに太織ふとおりの蒲團ふとんを畳みながら「お父さんはお前が帰つて來たので、急に氣が強くおなりなんだよ」といつた。私には父の挙動がさして虚勢を張つているようにも思えなかつた。

私の兄はある職を帶びて遠い九州にいた。これは万一小事がある場合でなければ、容易に父母ちちばはの顔を見る自由きゆの利かない男であつた。妹は他国ひとくにへ嫁よいだ。これも急場の間に合うよう、おいそれと呼び寄せられる女ではなかつた。兄妹きょうだい三人のうちで、一番便利なのはやはり書生をしていく私だけであつた。その私が母のいい付け通り学校の課業ほうを放り出して、休み前に帰つて來たという事が、父には大きな満足であつた。

夏目漱石

「これしきの病氣に学校を休ませては氣の毒だ。お母さんがあまり仰山な手紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういった。こういつたばかりでなく、今まで敷いていた床を上げさせて、いつものような元気を示した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆回すといけませんよ」

私のこの注意を父は愉快そうにしかし極めて軽く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要心さえしていれば」

實際父は大丈夫らしかつた。家中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈も感じなかつた。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かつたが、これはまた今始まつた症状でもないので、私たちは格別それを気に留めなかつた。

私は先生に手紙を書いて恩借の礼を述べた。正月上京する時に持参するからそれまで待つてくれるようとにと断わつた。そうして父の病状の思つたほど険惡でない事、この分なら当分安心な事、眩暈も嘔氣も皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪についても一言の見舞を附け加えた。私は先生の風邪を實際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかつた。出した後で父や母と先生の尊うわざなどをしながら、遙かに先生の書斎を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸しいたけでも持つて行つてお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸なぞを食うかしら」

「旨くはないが、別に嫌いな人もないだろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であつた。

先生の返事が来た時、私はちょっと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかつた時、驚かされた。先生はただ親切づくりで、返事を書いてくれたんだと私は思つた。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになつた。もつともこれは私が先生から受け取つた第一の手紙には相違なかつたが。

第一というと私と先生の間に書信の往復がたびたびあつたように思われるが、事実は決してそうでない事をちよつと断わつておきたい。私は先生の生前にたつた二通の手紙しか貰つていない。その一通は今いうこの簡単な返書で、との一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大変長いものである。

夏目漱石

父は病気の性質として、運動を慎まなければならないので、床を上げてからも、ほとんど戸外へは出なかつた。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万一をきづかて、私が引き添うように傍に付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑つて応じなかつた。

二十三

私は退屈な父の相手としてよく将碁盤に向かつた。二人とも無精な性質なので、炬燵にあたつたまま、盤を櫓の上へ載せて、駒を動かすたびに、わざわざ手を掛け蒲団の下から出すような事をした。時々持駒を失くして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付けて、火箸で挟み上げるという滑稽もあつた。

「碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤は好いね、こうして楽に差せるから。無精者には持つて来いだ。もう一番やろう」
 父は勝つた時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうといつた。要するに、勝つても負けても、炬燵にあたつて、将碁を差したがる男であつた。始めのうちは珍しいので、この隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経つに伴れて、若い私の気力はそのくらいな刺戟で満足できなくなつた。私は金や香車を握った拳を頭の上へ伸ばして、時々思い切つたあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているよう感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であつた。他に認められるという点からいえばどちらも零であつた。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、歓楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰い込んでいるといつても、血のなかに先生の命が流れているといつても、その時の私には少しも誇張でないようと思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であると明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐になつて來た。これは夏休みなどに國へ帰る誰でもが一様に経験する心持だらうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないよう、ちやほや歓待もてなされるのに、その峠を定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滯在中にその峠を通り越した。その上私は國へ帰るたびに、父にも母にも解らない変なところを東京から持つて帰つた。昔でいうと、儒者じゅしゃの家へ切支丹キリシタン_{にお}の臭いを持ち込むように、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかつた。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、いつかそれが父や母の眼に留まつた。私はつい面白くなくなつた。早く東京へ帰りたくなつた。

父の病氣は幸い現状維持のままで、少しも悪い方へ進む模様は見えなかつた。念のためにわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらつてもやはり私の知つている以外に異状は認められなかつた。私は冬休みの尽きる少し前に國を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

夏目漱石

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいつた。
「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいつた。
私は自分の極めた出立の日を動かさなかつた。

二十四

東京へ帰つてみると、松飾はいつか取り扱われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかつた。

私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。例の椎茸もついでに持つて行つた。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれといいましたとわざわざ断つて奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあつた。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持つて見て、軽いのに驚かされたのか、「こりや何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色々掛念の問い合わせを繰り返してくれた中に、先生はこんな事をいった。

「なるほど容体を聞くと、今が今どうという事もないようですが、病氣が病氣だからよほど氣をつけないといけません」

先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知つていた。

「自分で病氣に罹つていながら、気が付かないで平氣でいるのがあの病の特色です。私の知つたある士官は、とうとうそれではやられたが、全く嘘のような死に方をしたんですよ。何しろ傍に寝ていた細君が看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいといって、細君を起したぎり、翌朝はもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思つてたんだつていうんだから」

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になつた。

「私の父もそんなになるでしようか。ならんともいえないです」

「医者は何というのです」

「医者は到底治らないというんです。けれども当分のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじや好いでしよう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かずにいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人なんだから」

私はやや安心した。私の変化を凝じつと見ていた先生は、それからこう付け足した。

夏目漱石

「しかし人間は健康にしろ病氣にしろ、どつちにしても脆いものですね。いつどんな事で
どんな死にようをしないとも限らないから」

「先生もそんな事を考えてお出ですか」

「いくら丈夫の私でも、満更考えない事もありません」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじやありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人
もあるでしょう。不自然な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしよう
「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですね」

「殺される方はちつとも考えていなかつた。なるほどそういうえばそうだ」

その日はそれで帰つた。帰つてからも父の病氣はそれほど苦にならなかつた。先生の
いつた自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与
えただけで、後は何らのこだわりを私の頭に残さなかつた。私は今まで幾度か手を着けよ
あと

夏目漱石

うとしては手を引つ込んだ卒業論文を、いよいよ本式に書き始めなければならぬないと想い出した。

二十五

その年の六月に卒業するはずの私は、ぜひともこの論文を成規通り四月いっぱいに書き上げてしまわなければならなかつた。一二、三、四と指を折つて余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑つた。他のものはよほど前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私はただ年が改まつたら大いにやろうという決心だけがあつた。私はその決心でやり出した。そうして忽ち動けなくなつた。今まで大きな問題を空に描いて、骨組みだけはほぼでき上つているくらいに考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論をちょっと付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであつた。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしようといった。狼狽した氣味の私は、早速先生の所へ出掛け、私の読まなければならない参考書を聞いた。先生は自分の知つている限

夏目漱石

りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうといった。しかし
先生はこの点について毫も私を指導する任に当ろうとしなかつた。
「近頃はあまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が
が好いでしよう」

先生は一時非常の読書家であつたが、その後どういう訳か、前ほどこの方面に興味が働
かなくなつたようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思い出し
た。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならない
と思うせいでしょう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして
知らないと恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほど

夏目漱石

の恥でないよう見えたものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早くいえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味くみを帶びていなかつただけに、私にはそれほどの手応えもなかつた。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰つた。

それからの私はほとんど論文に祟たたかられた精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前に卒業した友達について、色々様子を聞いてみたりした。そのうちの一人は締切の日に車で事務所へ馳かけつけて漸ようやく間に合わせたといつた。他の一人は五時を十五分ほど後おくらして持つて行つたため、危あやうく跳ね付けられようとしたところを、主任教授の好意でやつと受理してもらつたといつた。私は不安を感じると共に度胸すを据えた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫にはいつて、高い本棚のあちらこちらを見廻みまわした。私の眼は好事家こうずかが骨董こつとうでも掘り出す時のように背表紙の金文字をあさつた。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向むきを南へ更えて行つた。それが一仕切経ひとしきりたつと、桜の噂うわざがちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭むち

夏目漱石

うたれた。私はついに四月の下旬が来て、やつと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居を跨またがなかつた。

二十六

私の自由になつたのは、八重桜の散つた枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であつた。私は籠を抜け出した小鳥の心をもつて、広い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行つた。枳殻の垣が黒ずんだ枝の上に、萌るような芽を吹いていたり、柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかそうに日光を映していたりするのが、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉しそうな私の顔を見て、「もう論文は片付いたんですか、結構ですね」といった。私は「お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事がすでに結了して、これから先は威張つて遊んでも構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもつていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋々した。先生はいつもの調子で、「なるほど」とか、「そうですか」とかいつてくれたが、それ以上の批

評は少しも加えなかつた。私は物足りないというよりも、聊か拍子抜けの氣味であつた。
 それでもその日私の氣力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々して
 いた。私は青く蘇生^{よみがえ}ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましよう。外へ出ると大変好い心持です」

「どこへ」

私はどこでも構わなかつた。ただ先生を伴^つれて郊外へ出たかつた。

一時間の後^{のち}、先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛^{あて}もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を抜^ぬぎ取つて芝笛^{しばぶえ}を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもつて、その人の真似^{まね}をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖^とざされたように鬱鬱^{こんもり}した小高い一構え^{ひとかま}の下に細い路^{みち}が開けた。門の柱に打ち付けた標札に何々園があるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだら

夏目漱石

だら上りになつている入口を眺めて、「はいつてみようか」といつた。私はすぐ「植木屋ですね」と答えた。

植込の中を一うねりして奥へ上ると左側に家があつた。明け放つた障子の内はがらんとして人の影も見えなかつた。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼つてある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいつても構わないだろうか」
「構わないでしよう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかつた。躊躇が燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで桿色の丈の高いのを指して、「これは霧島でしょう」といつた。

芍薬も十坪あまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかつた。この芍薬畠の傍にある古びた縁台のようなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余つた端の方に腰をおろして烟草を吹かした。先生は蒼い透き徹るような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよく

夏目漱石

よく眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹かえででも同じ色を枝に着けているものは一つもな
かつた。細い杉苗いただきの頂いただきに投げ被かぶせてあつた先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

二十七

私はすぐその帽子を取り上げた。ところどころに着いている赤土を爪で彈きながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

身体からだを半分起してそれを受け取つた先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のままで、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家うちには財産がよっぽどあるんですか」

「あるというほどありやしません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田地でんぢが少しあるぎりで、金なんかまるでないんでしよう」

先生が私の家の経済について、問い合わせを掛けたのはこれが始めてであつた。私の方はまだ先生の暮し向きに關して、何も聞いた事がなかつた。先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑うたぐつた。その後もこの疑いは絶えず私の胸

夏目漱石

を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思つていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんですか。どのくらいの財産をもつていらっしやるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装をしていた。それに家内^{かない}は小人數^{こにんすう}であつた。したがつて住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢^{ぜいたく}といえないまでも、あたじけなく切り詰めた無彈力性のものではなかつた。

「そうでしょう」と私がいつた。

「そりやそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じやありません。財産家ならもつと大きな家^{うち}でも造るさ」

この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐あぐらをかいていたが、こういい終ると、竹の杖つえの先で地面の上へ円のようなものを描かき始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直まっすぐに立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言のようであつた。それですぐ後に尾あとついて行き損なつた私は、つい黙つていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかつた。むしろ不調法で答えられなかつたのである。すると先生がまた問題を他よそへ移した。

「あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」

私は父の病氣について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送つてくれる為替かわせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟しゅせきであつたが、病氣の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつた。その上書体も確かにあつた。この種の病人に見る顛ひるえが少しも筆の運びを乱していなかつた。

夏目漱石

「何ともいつて来ませんが、もう好いんでしょう」

「好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」

「やつぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合つてるんでしょう。何ともいつて来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病氣を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思って聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた。

二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言葉遣いをするのが気に触つたら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、いつ死ぬか分らないものだからね」

夏目漱石

先生の口氣は珍しく苦々しかつた。

「そんな事をちつとも気に掛けちゃいません」と私は弁解した。

「君の兄弟は何人でしたかね」と先生が聞いた。

先生はその上に私の家族の人数を聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問い合わせなどした。そうして最後にこういつた。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもいないようです。大抵田舎者ですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかつた。

「田舎者は都會のものより、かえつて悪いくらいなもので。それから、君は今、君の親戚などの中に、これといって、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思つているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普

夏目漱石

通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。
だから油断ができないんです」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかつた。私はまたここで何かいおうとした。すると後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返つた。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すようにな茂つて生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が駆けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被つたまま先生の前へ廻つて礼をした。

「叔父さん、はいつて来る時、家に誰もいなかつたかい」と聞いた。
「誰もいなかつたよ」

「姉さんやおつかさんが勝手の方にいたのに」
「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日はつて、断つてはいつて来ると好かつたのに」

先生は苦笑した。懷中から墓口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。

夏目漱石

「おつかさんにはういとくれ。少しここで休まして下さいとれ」

小供は怜俐りこうそうな眼に笑わらいを漲みなぎらして、首肯うなずいて見せた。

「今斥候長せつこうちようになつてゐるところなんだよ」

小供はこう断つて、躊躇つづじの間を下の方へ駆け下りて行つた。犬も尻尾しつぽを高く卷いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行つた方へ駆けていつた。

二十九

先生の談話は、この犬と小供のために、結末まで進行する事ができなくなつたので、私はついにその要領を得ないでしまつた。先生の気にする財産うんぬん云々の掛念はその時の私には全くなかつた。私の性質として、また私の境遇からいつて、その時の私には、そんな利害の念に頭を悩ます余地がなかつたのである。考えるとこれは私がまだ世間に出ていためもあり、また実際その場に臨まないためでもあつたろうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間際に、誰でも悪人になるという言葉の意味であつた。单なる言葉としては、これだけでも私に解らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもつと知りたかつた。

犬と小供こどもが去つたあと、広い若葉の園は再び故の静かさに帰つた。そうして我々は沈黙に鎖とされた人のようにしばらく動かずについた。うるわしい空の色がその時次第に光を失つて來た。眼の前にある樹は大概楓かえでであつたが、その枝に滴しだたるように吹いた軽い緑の若

夏目漱石

葉が、段々暗くなつて行くように思われた。遠い往来を荷車を引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私はそれを村の男が植木か何かを載せて縁日へでも出掛けるものと想像した。先生はその音を聞くと、急に瞑想から呼息を吹き返した人のように立ち上がつた。

「もう、そろそろ帰りましょう。大分日が永くなつたようだが、やつぱりこう安閑としているうちに、いつの間にか暮れて行くんだね」

先生の背中には、さつき縁台の上に仰向きに寝た痕がいっぱい着いていた。私は両手でそれを払い落した。

「ありがとう。脂がこびり着いてやしませんか」

「綺麗に落ちました」

「この羽織はつい此間拵えたばかりなんだよ。だからむやみに汚して帰ると、妻に叱られるからね。有難う」

二人はまだだらだら坂の中途にある家の前へ来た。はいる時には誰もいる氣色の見えなかつた縁に、お上さんが、十五、六の娘を相手に、糸巻へ糸を巻きつけていた。二人は大き

夏目漱石

な金魚鉢の横から、「どうもお邪魔をしました」と挨拶した。お上さんは「いいえお構い申
しも致しません」と礼を返した後、先刻小供にやつた白銅の札を述べた。
門口かどぐちを出て二、三町ちょう来た時、私はついに先生に向かつて口を切つた。

「さきほど先生のいわれた、人間は誰だれでもいざという間際に悪人になるんだという意味で
すね。あれはどういう意味ですか」

「意味といつて、深い意味もありません。——つまり事実なんですよ。理屈じやないんだ」「
事実で差支えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一
体どんな場合を指すのですか」

先生は笑い出した。あたかも時機じきの過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといつ
た風ふうに。

「金さ君。金を見ると、どんな君子くんしでもすぐ悪人になるのさ」

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰らなかつた。先生が調子に乗らないごとく、
私も拍子抜けの気味であつた。私は澄ましてさつきと歩き出した。いきおい先生は少し後おく
れがちになつた。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。

夏目漱石

「そら見たまえ」

「何をですか」

「君の気分だつて、私の返事一つですぐ変るじゃないか」

待ち合わせるために振り向いて立ち留まつた私の顔を見て、

先生はこういつた。

三十

その時の私は腹の中で先生を憎らしく思つた。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いいのか、まるで私の態度に拘泥^{こだわ}する様子を見せなかつた。いつもの通り沈黙がちに落ち付き払つた歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹^{ごうはら}になつた。何とかいつて一つ先生をやつ付けてみたくなつて來た。

「先生」

「何ですか」

「先生はさつき少し昂奮^{こうふん}なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多^{めった}に見た事がないんですが、今日は珍しいところを拝見したような気がします」

先生はすぐ返事をしなかつた。私はそれを手応えのあつたようにも思つた。また的^{まと}が外れたようにも感じた。仕方がないから後はいわない事にした。すると先生がいきなり道の

夏目漱石

端はじへ寄つて行つた。そうして綺麗きれいに刈り込んだ生垣いけがきの下で、裾すそをまくつて小便をした。私は先生が用を足す間まぼんやりそこに立つていた。

「やあ失敬」

先生はこういつてまた歩き出した。私はとうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々賑にぎやかになつた。今までちらほらと見えた広い畠はたけの斜面や平地ひらちが、全く眼に入らないように左右の家並いえなみが揃そろつてきた。それでも所々宅地ところどろの隅などに、豌豆えんどうの蔓づるを竹にからませたり、金網かなあみで鶏を囲い飼いにしたりするのが閑静に眺められた。市中から帰る駄馬だばが仕切りなく擦すれ違つて行つた。こんなものに始終氣と奪なられがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りをした時、私は実際それを忘れていた。

「私は先刻さつきそんなに昂奮したように見えたんですか」

「そんなにというほどでもありませんが、少し……」

夏目漱石

「いや見えて構わない。実際昂奮するんだから。私は財産の事をいうときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年たつても二十年たつても忘れやしないんだから」

先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかつた。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであつた。先生の口からこんな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかつた。私は先生の性質の特色として、こんな執着力をいまだかつて想像した事さえなかつた。私は先生をもつと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処に、私の懐かしみの根を置いていた。一時の気分で先生にちよつと盾たてを突いてみようとした私は、この言葉の前に小さくなつた。先生はこういつた。

「私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼らは、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変つたのです。私は彼らから受けた屈辱と損害を小供こどもの時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負わされ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘

夏目漱石

れる事ができないんだから。しかし私はまだ復讐ふくしゅうをしづにいる。考えると私は個人に対す
る復讐以上の事を現にやつてはいるんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表して
いる人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思う」
私は慰藉いしゃの言葉さえ口へ出せなかつた。

三十一

その日の談話もついにこれぎりで発展せずにしまつた。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかつたのである。

二人は市の外れから電車に乗つたが、車内ではほとんど口を聞かなかつた。電車を降りると間もなく別れなければならなかつた。別れる時の先生は、また変つていた。常よりは晴やかな調子で、「これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ」といつた。私は笑つて帽子を脱^とつた。その時私は先生の顔を見て、先生ははたして心のどこで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと疑^{うたぐ}つた。その眼、その口、どこにも厭世的^{えんせいてき}の影は射^さしていなかつた。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々^{まま}あつたといわなければならない。先生の談話は時として不得要領^{ふとくようりょう}に終つた。その日二人の間に起つた郊外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏に残つた。

夏目漱石

無遠慮な私は、ある時ついにそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はこういった。

「頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解つてゐるくせに、はつきりいつてくれないのは困ります」

「私は何にも隠してやしません」

「隠していらっしゃいます」

「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごぢやに考へてゐるんじゃないかもしれませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考へをむやみに人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」

「別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風に、私の顔を見た。巻煙草を持っていたその手が少し震えた。

夏目漱石

「あなたは大胆だ」

「ただ眞面目なんです。眞面目に人生から教訓を受けたいのです」

「私の過去を許してもですか」

「許くという言葉が、突然恐ろしい響きをもつて、私の耳を打つた。私は今私の前に坐っているのが、一人の罪人であつて、不斷から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼かつた。

「あなたは本当に眞面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑つている。しかしどもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つている。あなたはそのたつた一人になれますか。なつてくれますか。あなたははらの底から眞面目ですか」

「もし私の命が眞面目なものなら、私の今いつた事も眞面目です」

私の声は顫えた。

夏目漱石

「よろしい」と先生がいつた。「話しましよう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましよう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取つてそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増ましかも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適当の時機が来なくつちや話さないんだから」

私は下宿へ帰つてからも一種の圧迫を感じた。

三十二

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかつたらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は徽^{かびくさ}臭くなつた古い冬服を行李^{こうり}の中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑^{あつ}そうな顔ばかりであつた。私は風の通らない厚羅紗^{あつらしや}の下に密封された自分の身体^{からだ}を持て余した。しばらく立つているうちに手に持つたハンケチがぐしょぐしょになつた。

私は式が済むとすぐ帰つて裸体^{はだか}になつた。下宿の二階の窓を開けて、遠眼鏡^{とおめがね}のようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになつて、室^{へや}の真中に寝そべつた。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立つて一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。

私はその晩先生の家へ御馳走ごちそうに招かれて行つた。これはもし卒業したらその日の晩餐ばんさんはよそで喰わずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であつた。

食卓は約束通り座敷の縁近くに据えられてあつた。模様の織り出された厚い糊のりの硬い卓布テーブルクロースが美しくかつ清らかに電燈の光を射返いかえしてゐた。先生のうちに飯めしを食うと、きっとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸や茶碗はし ちゃわんが置かれた。そしてそれが必ず洗濯したての真白まっしろなものに限られていた。

「カラやカフスと同じ事さ。汚れたのを用いるくらいなら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくつちや」

こういわれてみると、なるほど先生は潔癖であつた。書斎なども実に整然きっちりと片付いていた。無頓着な私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まつた。

「先生は痼性かんじょうですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは「でも着物などは、それほど気にならないようですよ」と答えた事があつた。それを傍に聞いていた先生は、「本当をいうと、私は精神的に痼性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分じょうぶんだ」といつて笑つた。精神的に痼性という意味は、俗にいう神經質という意味か、ま

夏目漱石

たは倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつた。

その晩私は先生と向い合せに、例の白い卓布^{たくふ}の前に坐つた。奥さんは一人を左右に置いて、ひとり庭の方を正面にして席を占めた。

「お目出とう」といつて、先生が私のために杯^{さかずき}を上げてくれた。私はこの盃^{さかずき}に対してそれほど嬉しい氣を起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもつていなかつたのが、一つの源因^{げんいん}であつた。けれども先生のいい方も決して私の嬉しさを唆^{そそ}る浮々^{うきうき}した調子を帶びていなかつた。先生は笑つて杯^{さかずき}を上げた。私はその笑いのうちに、些^{ちつ}とも意地の悪いアイロニーを認めなかつた。同時に目出たいという真情も汲み取る事ができなかつた。先生の笑いは、「世間はこんな場合によくお目出とうといいたがるものですね」と私に物語つていた。

奥さんは私に「結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしよう」といつてくれた。
私は突然病氣の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持つて行つて見せてやろうと思つた。
「先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。

夏目漱石

「どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。

「ええ、たしかしまつてあるはずですが」

卒業証書の在処ありどころは一人ともよく知らなかつた。

三十三

飯になつた時、奥さんは傍に坐つてゐる下女げじょを次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた。これが表立たない客に対する先生の家の仕来りらしかつた。始めの一、二回は私も窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗ちゃわんを奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。

「お茶?
ご飯?
ずいぶんよく食べるのね」

奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事をいうことがあつた。しかしその日は、時候が時候なので、そんなに調戯からかわれるほど食欲が進まなかつた。

「もうおしまい。あなた近頃ちかごろ大変しょうしょく小食になつたのね」

「小食になつたんじやありません。暑いんで食われないんです」

奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子みずがしを運ばせた。

「これは宅うちで揃えたのよ」

用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞うだけの余裕があると見えた。
私はそれを二杯更かえてもらつた。

「君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際で背中を障子に靠たせていた。

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的もなかつた。返事にためらつている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。

「本当いうと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんですから。だいちどれが善いか、どれが悪いか、自分がやつて見た上でないと解らないんだから、選択に困る訳だと思います」

「それもそうね。けれどもあなたは必竟財産があるからそんな呑気な事をいつていられるのよ。これが困る人でご覽なさい。なかなかあなたのように落ち付いちやいられないから」

私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があつた。私は腹の中で奥さんのいう事実を認めた。しかしこういつた。

「少し先生にかぶれたんでしよう」

「碌なかぶれ方をして下さらぬのね」

先生は苦笑した。

「かぶれても構わないから、その代りこの間いつた通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらつてお置きなさい。それでないと決して油断はならない」

私は先生といつしょに、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躊躇の咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途に、先生が昂奮した語氣で、私に物語つた強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄い言葉であつた。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあつた。

「奥さん、お宅の財産はよツほどあるんですか」

「何だつてそんな事をお聞きになるの」

「先生に聞いても教えて下さらないから」

夏目漱石

奥さんは笑いながら先生の顔を見た。

「教えて上げるほどないからでしよう」

「でもどのくらいあつたら先生のようにしていられるか、宅^{うち}へ帰つて一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」

先生は庭の方を向いて、澄まして烟草^{タバコ}を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかつた。

「どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかこうか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜いとして、あなたはこれから何か為^なさらなくつちや本当にいけませんよ。先生のようにごろごろばかりしていやしないさ……」

「ごろごろばかりしていやしないさ」

先生はちょっと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。

三十四

私はその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国するはずになつていたので、座を立つ前に私はちょっと暇乞いの言葉を述べた。

「また当分お目にかかりませんから」

「九月には出ていらつしやるんでしようね」

私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかつた。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て送ろうとも考えていなかつた。私には位置を求めるための貴重な時間というものがなかつた。

「まあ九月頃になるでしよう」

「じやすいぶんご機嫌よう。私たちもこの夏はことによるとどこかへ行くかも知れないのよ。ずいぶん暑そだから。行つたらまた絵端書えはがきでも送つて上げましよう」「どちらの見当です。もしいらつしやるとすれば」

先生はこの問答をにやにや笑つて聞いていた。

夏目漱石

「何まだ行くとも行かないとも極めていやしないんです」

席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「時にお父さんの病気はどうなんです」と聞いた。私は父の健康についてほとんど知るところがなかった。何ともいつて来ない以上、悪くはないのだろうくらいに考えていた。

「そんなに容易^{たやすく}考えられる病気じやありませんよ。尿毒症^{にょうどくしょう}が出ると、もう駄目^{だめ}なんだから」

尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見した時に、私はそんな術語をまるで聞かなかつた。

「本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんもいつた。「毒が脳へ廻^{まわ}るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じやないわ」

無経験な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしていた。
 「どうせ助からない病気だそうですから、いくら心配したつて仕方がありません」「そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」

夏目漱石

奥さんは昔同じ病氣で死んだという自分のお母さんの事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこういつたなり下を向いた。私も父の運命が本当に氣の毒になつた。

すると先生が突然奥さんの方を向いた。

「静、お前はおれより先へ死ぬだらうかね」

「なぜ」

「なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも『おれ』の方がお前より前に片付くかな。大抵

世間じや旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになつてゐる」

「そう極つた訳でもないわ。けれども男の方はどうしても、そら年が上でしよう」

「だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると『おれ』もお前より先にあの世へ行かなくつちやならない事になるね」

「あなたは特別よ」

「そうかね」

「だつて丈夫なんですもの。ほんと煩つた例がないぢやありませんか。そりやどうしてたつて私の方が先だわ」

夏目漱石

「先かな」

「え、きつと先よ」

先生は私の顔を見た。私は笑つた。

「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」

「どうするつて……」

奥さんはそこで口籠くちごもつた。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちょっと奥さんの胸を

襲うつたらしかつた。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更かえていた。

「どうするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定ろうしょふふじょうつていうくらいだから」

奥さんはことさらに私の方を見て笑談じょうだんらしくこういつた。

三十五

「私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になつていた。

「君はどう思います」と先生が聞いた。

先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判断のつくべき問題ではなかつた。私はただ笑つていた。

「寿命は分りませんね。私にも」

「こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極きまつた年数をもらつて来るんだから仕方がないわ。先生のお父さんやお母さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなつたのが」

「亡くなられた日がですか」

「まさか日まで同じじやないけれども。でもまあ同じよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」

この知識は私にとつて新しいものであつた。私は不思議に思つた。

夏目漱石

「どうしてそう一度に死なれたんですか」

奥さんは私の間に答えようとした。先生はそれを遮った。

「そんな話はお止しよ。つまらないから」

「先生は手に持つた団扇をわざとばたばたいわせた。そうしてまた奥さんを顧みた。
静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」

奥さんは笑い出した。

「ついでに地面も下さいよ」

「地面は他のものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」

「どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰つても仕様がないわね」

「古本屋に売るさ」

「売ればいくらぐらいになつて」

先生はいくらともいわなかつた。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかつた。そうしてその死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていた。奥さん

夏目漱石

も最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。

「おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍おつしやるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだらは止して頂戴。ちょうだい縁喜えんぎでもない。あなたが死んだら、何でもあなた

の思い通りにして上げるから、それで好いじやありませんか」

先生は庭の方を向いて笑つた。しかしそれぎり奥さんの厭がる事をいわなくなつた。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。先生と奥さんは玄関まで送つて出た。

「ご病人をお大事に」だいじと奥さんがいつた。

「また九月に」と先生がいつた。

私は挨拶あいさつをして格子こうしの外へ足を踏み出した。玄関と門の間にあるこんもりした木犀もくせいの一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰やいんのうちに枝を張つていた。私は二、三歩動き出しながら、黒ずんだ葉に被われているその梢こずえを見て、来たるべき秋の花と香を想い浮べた。私は先生の宅うちとこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事のできないもののように、いつしょに記憶していた。私が偶然その樹きの前に立つて、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋

夏目漱石

に思いを馳^はせた時、今まで格子の間から射^さしていった玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へはいつたらしかつた。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。國へ帰る前に調^{ととの}える買物もあつたし、ご馳走^{ちそく}を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあつたので、ただ賑^{にぎ}やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といつしょに卒業したなにがしに会つた。彼は私を無理やりにある酒場^{バー}へ連れ込んだ。私はそこで麦酒^{ビール}の泡のような彼の気燄^{きえん}を聞かされた。私の下宿へ帰つたのは十二時過ぎであつた。

三十六

私はその翌日も暑さを冒して、頼まれものを買い集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないようになっていていたのが、いざとなると大変臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもつていなかつた。田舎者を憎らしく思つた。

私はこの一夏を無為に過ごす気はなかつた。國へ帰つてからの日程というようなものをあらかじめ作つておいたので、それを履行するに必要な書物も手に入れなければならなかつた。私は半日を丸善の一階で漬す覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立つて、隅から隅まで一冊ずつ点検して行つた。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であつた。小僧にいうと、いくらでも出しあはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になつては、ただ迷うだけであつた。その上価が極めて不定であつた。安からうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高からうと考えて、聞かずにはいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、

どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあつた。私は全く弱らせられた。そして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかつたかを悔いた。

私は鞄を買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがぴかぴかしているので、田舎ものを威嚇おどかすには充分であつた。この鞄を買うという事は、私の母の注文であつた。卒業したら新しい鞄を買つて、そのなかに一切の土産みやげものを入れて帰るようによつて、わざわざ手紙の中に書いてあつた。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私は母の料簡りょうけんが解らないというよりも、その言葉が一種の滑稽こつけいとして訴えたのである。

私は暇いとまご乞こねいをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰つた。この冬以来父の病氣について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならない地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかつた。私はむしろ父がいなくなつたあの母を想像して氣の毒に思つた。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覺悟していたに違ひなかつた。九州にいる兄へやつた手紙のなかにも、私は父の到底とてももと故のようないくつかの健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあるうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見

に帰つたらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりで田舎にいるのは定めて心細いだ
ろう、我々も子として遺憾の至りであるというような感傷的な文句さえ使つた。私は實際
心に浮ぶままを書いた。けれども書いたあととの氣分は書いた時とは違つていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考へてゐるうちに自分が自分に気の変りやすい
軽薄もののように思われて來た。私は不愉快になつた。私はまた先生夫婦の事を想ひ浮べ
た。ことに一、三日前晩食に呼ばれた時の会話を憶い出した。

「どつちが先へ死ぬだらう」

私はその晩先生と奥さんの間に起つた疑問をひとり口の内で繰り返してみた。そして
この疑問には誰も自信をもつて答える事ができないのだと思つた。しかしどつちが先へ死
ぬと判然分つていたならば、先生はどうするだらう。奥さんはどうするだらう。先生も奥
さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだらうと思つた。(死に近づきつつある
父を国元に控えながら、この私がどうする事もできないように)。私は人間を果敢ないも
のに観じた。人間のどうする事もできない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じた。

〔中巻へつづく〕



こころ 上 -先生と私-
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「こころ」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年2月25日第1刷

1995（平成7）年6月14日第10刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正3）年4月20日～8月11日

※誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」(区点番号 5-86)を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：伊藤時也

1999年7月31日公開

2004年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2(本文、奥付)

+ Omni Graffle Professional 5.2.1(表紙)

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers 2 + ヒラギノ明朝 Pro W3